

2018年度の外国語コンテスト英語部門は、11月15日（木）の午後2時半から、法学部のリーア・ギルナー先生と、短大のローラ・リー・クサカ先生を審査員としてお迎えして開催されました。24回目の今年度は、諸事情により直前に開催が1週間延期になってしまいましたが、最終的に国際コミュニケーション学部、経済学部、法学部、現代中国学部からの11名の参加者が自作の英語のスピーチを披露してくれました。国際コミュニケーション学部の横地華さんとナウファル・アルヴィン・スドラジャットくんが英語で進行を務めてくださいました。彼らのテンポの良いかけ合いとコメント、質問に会場が大いに盛り上がりました。

今回も、審査員の先生方にはスピーチの内容、表現の正確さ、発音の流暢さ、プレゼンテーションのスキルを総合的に判断し評価していただきました。昨年度からスライドを利用したの発表になりましたが、写真やグラフなど、発表内容を視覚的にバックアップするスライドがあることで、伝えたいメッセージがより明確に、力強いものになったのではと思います。

審査の結果、入賞者は以下の通りになりました。

- 1位：16K1069 小林 純歌 (Ayaka Kobayashi)
タイトル：“The Dramatic Influence of the Words”
- 2位：16K1047 迫田 篤志 (Atsushi Sakoda)
- 2位：17J1042 長屋 零菜 (Reina Nagaya)
- 3位：17C8063 下條 あん (An Shimojo)

1位の小林さん（国コミュ）のスピーチは言葉の持つ影響力についてでした。言葉の持つプラスの影響とマイナスの影響が実験結果やグラフ、写真を通して説明され説得力があったこと、また、スピーチ中の迫力あるパフォーマンスが高評価につながりました。2位の迫田くん（国コミュ）のスピーチは、スマートフォンが留学にもたらす弊害を、短期海外研修での経験から紐解いたものでした。フロアへの問いかけや分かりやすい発音、自然体のプレゼンテーションが評価されました。同じく2位の長屋さん（法）のスピーチは、「ながらスマホ」に警鐘を鳴らすものでした。自身が目にした「ながらスマホ」事故からはじまったスピーチの内容とフロアへの力強い問いかけが印象的でした。3位の下條さん（現中）のスピーチは、自身が高校留学で学んだことをまとめたものでした。間違いを気にせず積極的にコミュニケーションをとることの大切さや留学中に経験したホームシックが自分の成長につながったこと等を明瞭な発音で語ってくれました。

入賞者以外のスピーチのテーマも、環境問題や、大学入学後の決意に関してなど多岐にわたり、完成度が高かったので、審査にはかなりの時間を要しました。審査員のギルナー先生もクサカ先生も、今年は特に個人的なエピソードを交えたスピーチが多く、大変面白かったと褒めておられました。惜しくも入賞できなかった皆さん、よろしければ来年度、ぜひ再挑戦してみてください。お待ちしております。

（地村 みゆき）